
偶然と言う名の殺人

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然と言つ名の殺人

【Nコード】

N4265J

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

ティッシュペーパー二枚で作った人形。藁人形とまではいかないまでも噂では同等の力を持っているという。そしてその人形にカッターを刺しおろした、と同時に起こった事件。偶然か必然か、真実を捜す高校生の安楽椅子的物語。

第1話

ティッシューパー二枚で作った人形。
私はその胸にカッターを振り下ろした。

翌朝。

「美香、朝ごはんできてるわよ〜」
母の声に目が覚めて、私こと宮城美香はベッドから飛び起きた。
現在時刻は7時40分、学校に間に合う最後の電車は8時2分発
そして家から駅までは急いでも15分。つまり制限時間はあと7分
しかない。

急いで着替え、鞆を片手にダイニングへ。

そこにはゆつくりと食事をする両親が、珍しく箸を止めてテレビ
に見入っていた。

『 に見見された遺体は胸を一突きされて 』
「いつてきまーす」

私はそんな両親を気にする事もなく、目玉焼きの乗ったトースト
を口に詰めて、急いで駅に向かった。

なんとかギリギリで電車に乗れた私は、無事に学校の2年1組に
辿り着いた。

「おはよ〜」

「おはよう」

自分の席に座り、前にやってきた友達の西嶋彩子と挨拶を交す。

「ね〜、今朝のニュース見た〜？」

私は首を横に振り、尋ねる。

「何かあったの？」

「この近くで高校生が死んでたらしいよ。しかも噂によるとこの高校の生徒みたい」

「誰？」

「そこまでは分かんないけど、胸を一突きだったらしいからここに犯人がいるんじゃないか、っていう話」

最近はなくなったが、一年位前には警察沙汰になる事件が何度もあった。

今から丁度一年半前の6月に起きた、一クラス全員がそのクラスの生徒によって殺害された、という事件は、今でも学校に尾を引いている。

なのでこういう話題はデリケートであり、そして皆敏感なのだ。

『ピクンポクンパクンポクン、生徒会より連絡です。本日六時間目に体育館で緊急生徒朝会を行います。生徒の皆さんは五時間目の授業が終わり次第、至急体育館に集まって下さい。繰り返します。本日』

教室がざわつき各々がそれぞれの思いを友達に打ち明ける中、私はまだ教室に来ていない一人の生徒を思い浮かべていた。

1月になって二回目になる体育館は、ちょうど一週間前の全校集会の時と同じように寒かった。

「おはようございます、学生会長の二年、齊藤尊さいとう みにとです。本日は急遽、六限目を生徒集会に変更して下さい。先生方にありがとうございます。上げたいと思います」

そんな言葉から生徒会副会長の言葉は始まった。

「さて、皆さんは既にテレビなどで聞き及んでいる事かと思えますが、昨日の深夜、我が校の一生徒が亡くなりました」

ざわつく体育館。

私は、矢張りと思うと同時に、彼女であってほしい、そして彼女であってほしくない、という二律背反な思いを持っていた。

誰かの声で体育館は静まり返る。

「警察では、公式な発表はまだですが、昨年度の状況も踏まえ、生徒会に非公式ではありますが情報が提供くださいました。生徒の皆さんには落ち着いて聴いてほしいと思います。亡くなられたのは、2年1組の」

私のクラスで、今日学校に来なかったのは一人だけ。

彼女の名前は

「小嶋^{こじま}深香^{みか}さんです」

やっぱり、そうだったんだ。

第2話

同日の放課後。

私はとある扉の前に立っていた。扉には『相談部屋』という紙が斜めに貼られている。

コンコン

「しつれいしまーす」

「どうぞ」

中から馴染みの声が返ってきてホッとすると共に、扉を開けた。

「あけましておめでとう」

そう言うと、中にいた二人も返事を返してきた。

「おめでとー」

「おめでとつ」

井藤雅子いとつ まなこと御中佳奈実みなか かなみ、ここ相談部の部長と副部長だ。クラスは2年2組で、いつもこの時間はここにいる。

他にも相談部員はいるのだが兼部している生徒が多いせいか、だいたい私がここに来るとこの二人だけがいるのだ。

「美香ちゃん、今日はどうしたの？」

いつの間にか佳奈実が椅子を用意していて、私はそこに座って雅子と向かい合うように座った。佳奈実は今横でカップに紅茶を三人分淹れている。

私は佳奈実が紅茶を淹れ終わり、座ったのを確認してから話し始めた。

「今朝の集会のことなんだけど」

「うんうん」

雅子が頷く。

「小嶋深香が亡くなったんだよね」

「そう、生徒会の方には連絡があったし、個人的にもそう聞いているし、あと一応新聞部の人たちもそう聞いてるって言ってたよ」

「本当なんだ。何時頃亡くなったかは？」

「えっと、だいたい昨日の夜の、11時くらいだつて聞いたよ」
「やっぱりそうなのかな。」

「あの、驚かないで聞いてね」

「うん、大丈夫。去年の今頃なんて、妖怪を見たなんていう人も来たくらいだから、ちよつとやそつとじゃあ驚かないよ」

「うん。えっとね、その、もしかしたら何だけど、その、小嶋深香を殺したのつて、私かもしれないの」

馬鹿にされるだろう、と思いつながら俯していると紅茶をすする音が聞こえてきた。

顔を上げると雅子が目を細めて紅茶を飲んでた。隣にいる佳奈実は目を瞑つたまま黙っている。

「お、驚かないの？」

そう聞いてみると、雅子は首を少しだけ傾けてこう言ってきた。

「驚いてほしい？」

私は首を横に振った。

それに雅子は微笑んで、カップを置いてから続けた。

「実はね、そういう相談つて珍しくないのよ。私が誰かを殺したんじゃないかつて。でも、それは大体の場合は偶然なんだよね」

「偶然じゃない、よ」

私がそう言うと、今度は佳奈実が質問してきた。

「詳しい事を話してくれない？」

私は頷いて話し始める。

「えっと、前にも何度か話したと思うけど、小嶋深香と私つて仲が悪いじゃない。本当に遊び心だったんだけど……ティッシュペーパーで人形を作つてね。それと彼女を重ね合わせてカッターをその胸の部分に刺したの。それが大体、夜の11時ごろ」

「うん」

「だから私、自分が殺したんじゃないかつて思って、それで」

それで……何？

私はどうしたかった？

「私たちから言えることは、それは本当に偶然だった。たまたま時間が被ってしまったの。美香ちゃんは何も小嶋深香さんに対してしていないし、それは客観的な事実ではある。もし、小嶋深香さんが死んだ事を気に病むのなら、どうしてそう思うのかを考えればいい。そうすればきっと、自分が何をすべきか、見つかるよ」

雅子の言った言葉を噛み締める。

どうしてこんな気持ちになるのか、か。

自分が小嶋深香を殺してしまったから。でも本当はそれは嘘だと分かっている。でも、本当にそうなの？

別の人が殺したはずなんだよね。

そう、私じゃない別の人。きっと私と同じ学校に通っている、生徒。

本当の犯人が分かれば、その人から話を聞けば、私はやってないって確信できる。

よし、犯人を捜そう。

「うん、私、犯人を捜す」

目の前に座る二人は私のその言葉に静かに頷いた。

「それじゃあ、事件の詳細を説明するね」

佳奈実がそう言うのと立ち上がって窓際に立ち、既に夕日が沈み薄暗くなり始めた外を眺めた。

「あれは、そう。私がまだ家にいた時間だった。その時はまだ、私は今日あるはずだった一時間目の漢字のテストの勉強をしていたの。そして私がパイナップルをどうやって漢字で書くのか悩んでいると、突然それはやってきた。そう、それこそが」

スパコーン

いい音をたてて、口を半開きにした佳奈実が倒れる。

その音のもととなった真っ白なハリセンを持った雅子は、佳奈実を無視したまま私に向き直った。

「さて、それじゃあちゃんと説明するわね」

私はコクコクと頷いた。

第3話

「私の個人的な知り合いで宮さん、っていう刑事さんがいるんだけど、その人から聞いた話ね。私的に協力を頼まれているの。あんまり他言しないでね。」

事件があつたのは昨日の1月14日で、場所はこの学校近くの公園。小嶋さんが家を出たのが22時57分で家から公園までが走っても8分かかって、それで犬の散歩をしている人が通りかかって遺体が発見されたのが大体30分。だから死亡推定時刻は深夜23時5分から30分の間。凶器は刃渡りが15cmくらいの一般的なフルツナイフで、仰向けに倒れた状態で心臓をこうやって一突きされて、即死。まっすぐに心臓まで刺さっていたから、自殺ではないそうよ。肋骨に当たらないように刃を横に向けて刺したみたい。周りに争った形跡とかも見られないから顔見知りの犯行だ、って考えてるみたいね。家を出る前に携帯に非通知の電話がかかってきて、それで呼び出された可能性が高いって。最初から殺す気だったのか、それとも衝動的なものかは分からないけど。

目撃者はいないそうよ。現在警察は聞き込みの真つ最中。まああの時間のあの辺りは人通りが少ないからあんまり警察の方も期待していないみたいで、どちらかというと彼女の友達関係を中心に調べているみたい。彼女に恨みとかを持っている人は結構いて、これがそのリスト。美香ちゃんみたいに直接的に嫌悪を明らかにしているだけでもこの学校にもいるみたい。二年生だけで美香ちゃんを除いて少なくとも2人はいるみたいだし、他の学年にもいるわね。

まあ酷かったみたいよ。小さなものから大きなものまでイジメとか色々。私たちは共感はしてもどちらにも同意しかねる、っていう立場だからどっちが悪いとは言わないけど。話がそれたけど、彼女を恨んでいる人はこの学校に美香ちゃん以外にもいるっていう事。あと、これは相談部としては守秘すべき内容だから詳しくは言え

ないけど、一応伝えておくわね。今日の昼休みに小嶋さんのお友達の水村沙智さんと大槻友子さんの二人が来たわ。彼女達、大分動揺していて、今日は早退したそうよ」

言い終えて紅茶を一口飲んだ雅子は、隣に座った佳奈実を見た。視線を佳奈実に移すと彼女は一つ頷いてこっちを見返し、そしてテーブルの上のメモを見た。私もそこを見る。

ずらりと並んだ名前の中で、五つにマーカーが引かれていた。佳奈実がそれを読み上げる。

「山崎好美、大槻友子、音無緑、小岩亜理栖、美能結華、それと美香ちゃん。この六人がこの学校の生徒で、小嶋さんに何かしらの恨みをもっているみたい」

「あれ、大槻さんって」

「ん、そうなの。一応宮さんにも聞いてみたんだけど、彼女は強請られていたことがあったみたい。今はもう解消しているみたいだけど」

そうだったんだ。大槻さんも。

私は冷め始めた紅茶を一口飲んで、雅子から聞いた話を吟味する。まず気になったのは、何で小嶋深香は非通知の電話だったのに出かけたかっていう事だけど、これはやっぱり大槻さんが

「大槻さんは犯人じゃあ無いね」

そう言った佳奈実に、私はただ意味が分からず首を傾げた。

佳奈実は残った紅茶を一気に飲み干して話し始める。

「彼女、ここに来た時、本当に悲しんでたから。あれは嘘じゃない。でも、電話をかけたのは彼女だよ」

私は更に首を傾げ、佳奈実に続きを促す。

「なんで電話したか、とか彼女達が話してくれて、まだ警察にも言っていないし守秘義務があるから言いたくないんだけど。でも、言わないといけないよね」

私は頷く。

佳奈実はじつと私の目を見つめて、しばらくするとふうと息を吐

いてから話し出した。

「昨日が何の日か、っていうのは知らない、よね」

昨日が何の日か？

今日は昔、成人の日だったけど……。

「その日は小嶋さんの誕生日だったの。それで、大槻さんと水村さん、それに本村孔子もとむらひこうじさんの三人はサプライズで小嶋さんを呼び出して、夜の公園で小さなパーティーをやったんだって。手作りの小さなショートケーキをその場で四等分して、皆で食べるっていうさやかなパーティーだね。それが終わって、大槻さんと水村さんはすぐに帰ったみたい」

「それってつまり」

「ううん、本村さんも犯人じゃあないと思う」

私は訳が分からずに、ただ佳奈実の顔をじっと見ていた。

第4話

「それってどういう事？」

しばらく経ってからの私の質問には雅子が答えた。

「一応、警察の聴取によると、本村さんは公園の水道でケーキを切った包丁を洗っていた時に後ろから殴られて気絶させられたらしいわ。一応命に別状はないようだけど、今日は病院に泊まる事になるみたい。だから彼女じゃあないの。それと、凶器は胸に刺さったまま発見されたみたい。指紋は本村さんのしか取れなかったみたいだから、犯人は手袋をしていたんだと思うわ」

まとめると、昨夜の23:00頃に水村さん、大槻さん、本村さんの三人が誕生日を祝う為に小嶋深香を公園に呼び出した。それで大槻さんと水村さんはケーキを食べ終わったらすぐに帰って、本村さんは包丁を洗いに行った。その後、本村さんは後ろから殴られて、そして小嶋深香が刺された。

状況的には本村さんが持っていた包丁で本村さんを殴った犯人が刺したのだと思う。

「あ、そうそう。言い忘れていたけど、あの場所には高校指定の革靴の足跡しか残ってなかったそうよ。だから警察でもこの学校の生徒が犯人じゃないかって疑ってるみたい」

雅子がそう付け加えた。

つまりリストにあった私と大槻さんを除いた四人、山崎好美、音無緑、小岩亜理栖、美能結華が怪しいということだろう。

もう一度テーブルの上のメモを見る。

「この四人のプロフィールって分かる？」

試しに聞いてみると、佳奈実が頷いてどこからかノートを取り出して、その中の一ページを開いた。

そこには四人の事が色々と書いてあった。

山崎好美

生年月日：1993年8月3日

年齢：16

クラス：1年5組

身長：145cm程

血液型：A

所属：料理部、図書委員会

趣味：読書、料理

備考：視力が弱く眼鏡を掛けている。

音無緑

生年月日：1993年11月29日

年齢：16

クラス：1年5組

身長：150cm程

血液型：O

所属：陸上部

趣味：田奈浜赤沙の追っかけ

小岩亜理栖

生年月日：1993年2月28日

年齢：16

クラス：2年6組

身長：160cm程

血液型：不明

所属：陸上部

趣味：ネコ

美能結華

生年月日：1991年9月9日

年齢：18

クラス：3年2組

身長：160cm程

血液型：A

所属：元図書委員長

趣味：読書

「これって」

自然とそんな言葉が出てきた。

佳奈実は静かに頷くと説明をする。

「その四人は結構親しくて、警察の調べだと山崎好美さんが始めだったらしいよ。その後になんか知った三人も巻き込まれてしまった。ちなみに、この四人からの事情聴取はもうそろそろ終わるんじゃないかな」

緊急生徒集会の後に呼び出されていたのは、そういうわけだったんだ。

でも、四人とも大人しそう。小岩さんとは話した事はないけど、殺人なんてするような性格じゃあなかったと思う。

でももしかしたら。。。

自分がやっていない事が分かりそうに嬉しくもあったが、どこかやりきれない気持がする。

「あ、ちよつとごめんね」

唐突に雅子はそう言って立ち上がり、窓際で携帯を取り出し会話を始めた。

佳奈実は三人分の紅茶をいれなおし、それをテーブルに戻した。少し冷えてきた指先を暖めようとカップを両手で挟んでいると、雅子が戻ってきてこう言った。

「宮さんからの電話だったんだけど、その四人にはちゃんとしたりバイがあるそうよ。これから裏を取るって言っていたけどね」

「それってつまり四人が犯人じゃないっていうこと」
雅子は頷いた。

この四人が犯人じゃない。大槻さんも水村さんも本村さんも犯人じゃない。自殺じゃない。犯人はこの学校の生徒なのに、動機があつてアリバイが無いのはいない。

それじゃあやっぱ私が、この手で

どこからかボタンとものが倒れる音がして、私の意識は暗転した。

最終話

目を開けると、雅子の心配そうな顔がそこにあった。

「よかったー」

そう言っただけで安堵した雅子を見て、どうしてこんなことになったのかを思い出した。

小嶋深香を殺した人がいなくなって、私じゃないかって思ってしまった。そしたら椅子と一緒に倒れちゃったんだ。

上体を起こして周りを見ると、どうやら相談部室の床に横になっていたらしい。

外が真っ暗になっているので、結構な時間意識を失っていたようだ。

片手を床に突いて立ち上がり、さっきまで座っていた椅子に座りなおした。

雅子が座ると、いつの間にいれたのか、佳奈実が三人分の紅茶をテーブルにおいた。

「それで、美香ちゃんの中でどんな推理が練り広げられたのかな」
雅子が聞いてきて、私は倒れる直前に思っていたことをゆつくりと口にした。

「 だと思ったの」

一通り話し終えると、佳奈実は頷きながらこう言った。

「つまり美香ちゃんは優しすぎるんだね」

「えっ？」

意味が分からずにいると、佳奈実は続けた。

「そうやって最終的に自分のせいに来るのって、美香ちゃんが優しいからなんだよ。それが悪いとは言わないし、むしろ良いことなのかもしれないけど、ちゃんと現実も見よう。小嶋さんがどうやって殺されたのか。動機のある人は、美香ちゃんも含めて全員犯人だ

とは考えにくいから、殺せる可能性の高い人を考えよう」

可能性の高い人。

可能性があるのは、その時にあの場所にいた人。つまり、本村さん。

でも本村さんは後頭部に怪我をしていた。わざわざそこまでの大怪我を自分で作るとは考えにくい。

だったら。

「本村さんが小嶋深香を刺した後、手を水道で洗っている時に倒れて頭を打ったのかな」

佳奈実は頷いた。

「警察でもその線が濃厚になっていると思うから、本村さんに詳しい事を聞きにいくと思うよ」

そっか。

自分でやっていないとはっきり分かったのに、胸にはしこりがまだあるようだった。

「佳奈実、それだけじゃないでしょ？」

突然雅子が隣に座って紅茶を飲んでいる佳奈実に話し掛けた。

「それだけじゃないって？」

私の疑問には、雅子がハリセンを取り出したのを見て姿勢を正した佳奈実が答えた。

「それは、ナイフを刺したままにしたこと。これって不自然で本村さんが犯人じゃあないことを示しているんだけど、美香ちゃんが言った通り本村さんが犯人でもあるんだと思う」

一気に言われて頭が追いつかないが、とにかく頷く。

「問題はタイミングなの。小嶋さんが刺されたのと本村さんが頭を打ったのと。もし小嶋さんが刺された方が早かったら本村さんはナイフを刺したままにできなかったろうし、反対に本村さんが頭を打った方が早かったら小嶋さんは刺されることがない。もちろん本村さんが自分以外の人を犯人にしようとしていたなら別だけど、状況からみてそれは無いはず。だから、小嶋さんにナイフが刺さったの

と本村さんが頭を打つたのは同時だったの」

私は必死に内容を理解する。

「小嶋さんと本村さんの倒れていた位置は離れていて、二人とも動いた形跡がない。つまり、本村さんが倒れる時にたまたま手に持っていたナイフが飛んでいって、たまたま地面に横になった小嶋さんの胸に刺さって、本村さんはそれを見る間もなく後頭部を強打したんだと思うよ」

「つまり、それは事故っていうこと？」

そう聞くと佳奈実は頷いて紅茶を一気に飲み干した。

私は窓から見える星空を見て、深呼吸をする。

あの小嶋深香が知らない所で事故で死んだことに対する無常感か、あるいは自分が何かしたのではないかという一種の期待が裏切られたことに対する虚無感か。

どこか寂しい気持ちの隅に残ったまま、私は相談部室を後にした。

最終話（後書き）

最後まで駄文にお付き合いいただき、有難うございます。

反省。

正直言って、詰めが甘いです。

話の流れがあっち行きこっち行きしていて、しかも統一性が無かった。

自分で書いていて、矛盾している点とか、行動理由が不十分な点が多々あったことが分かったので、実際はそれ以上におかしな話だったのでしょう。

宣伝

相談部については、拙作「おこじよ」が初出となっております。

宮さんが誰なのか気になる方はどうぞ。

謝辞

もう一度、最後までお読みくださり、有難うございました。

これからも駄文ですが地道に書いていきたいと思っておりますので、よろしければ私の他の話もお読みいただければ嬉しい限りです。

以上

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265j/>

偶然と言う名の殺人

2010年10月8日15時24分発行